
平和な未来の為に……

玄人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平和な未来の為に……

【Nコード】

N2813P

【作者名】

玄人

【あらすじ】

その者はただ、平和の為に……

その男はただ、世界を救う為だけに存在した……

例え罵倒をあびようとも、裏切り者と言われようとも関係ない

……

それがその男、『転生者』の願いなのだから……

魔法先生ネギま！二次創作小説、ネギま！の世界にオリキャラ一人を加えた物語です。主人公は転生者、自らの願いの為に頑張ります。初心者ですが、楽しんでいただければ幸いです。どうか長い目で見て見守って下さい。最新は不定期となりますので悪しからずご了承下さい。

1／22 プロログから第3話まで空白空け、文章を一部修正しました

プロローグ（前書き）

修正して再投稿

プロローグ

何かを成し遂げる為には、それ相応の対価が必要である……

『お前、俺達の仲間にならないか？』

その対価は人それぞれであり、対価の有無も人それぞれである……

『――まるで誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのようだ――
ですか？』

成し遂げる事が小さければ対価も小さい……

『僕達の仲間になる気はないかい？』

しかし、もし成し遂げる事が大きければ対価も大きく、何かを切り捨てなければならぬ……

『俺は無敵の『千の呪文の男』サウザンドマスターだぜ？ 俺は勝つ！！ 任せとけ！！』

そして彼もまた、何かを成し遂げる為にそれ相応の対価が必要だった……

『今日もまた、一人の命を救えたよ』

そして、成そうとしている事は……

『だからその程度の戦力でいいのかって聞いてんだよ』

あまりにも……

『オイオイ、冗談だろ……？』

大きかった……

『不知火ーーーーッ!!!!』

これは、大きな事を成し遂げる為に転生してきた男、
の物語である……

キサラギ シラスイ
如月不知火

第1話 彼の者、来たる（前書き）

修正して再投稿

第1話 彼の者、来たる

『麻帆良学園』

世界的にも有名な巨大学園都市にある学校で、幼稚園から大学までエスカレーター式で存在するマンモス校である。

しかしそれは表向きであり、裏では日本の関東魔法協会総本部になっていて、魔法生徒や魔法先生といった裏の世界に関わる者達がいる。

そんな魔法学校に、一人の男がやってきた。

否、正確には転移してきたの間違いである……

「時間跳躍……成功。座標転移……成功。現在地、麻帆良学園敷地内と確認」

その者は淡々と言葉を紡ぐ。服装は全身黒を基調としておりやや長身であるが、顔全体を包むように黒い仮面を付けてた。その仮面は紅い眼を光らせ、三日月状に裂け歯が見える口と不気味さを醸し出していた。

「現在の時刻深夜、周辺状況……魔力保持者複数がこちらに接近中……か」

そう言葉を発すると懷から魔法具を取り出し、それを起動させた。

「まったく今日は本当に厄日だな!! 貴様には負けるわ学園外の者に浸入されるわで!!」

「浸入されたのは僕のせいじゃないですよ!?!」

「えーいウルサイウルサイ!? 全部貴様が悪いんだーッ!!」

「落ち着いて下さいマスター」

そんな会話をしながら四人、ネギとエヴァ、明日菜、茶々丸は現在魔力を関知した世界樹近くの広場へと向かっていた。

向かっていたのだが……

「それになぜ私がボーヤの杖に乗らなければならんだ!!」

世界樹広場へ向かうためにエヴァはネギの杖に乗り、明日菜は茶々丸にお姫様抱っこをされていた。

「仕方ないでしょ!! 私^がネギの杖に乗ると調子悪くなるんだから!!」

「そんな事知るか! 貴様は走れば良からうが!!」

「無茶言わないでよ!!」

「ふ、二人とも落ち着いて」「貴様^{アンタ}は黙ってろ(なさい)!!!!」
「ヒーンっ!?!」

そんな会話をしながらも目的地へと向かうが、ある異変に気づいた。

「なっ!?! そんなバカな……」

「どっ、どうしたんですかエヴァンジェリンさん?」

いち早く異変に気づいたのはエヴァであったが信じられない様

子で言葉を発し、それを不思議に思ったネギが訪ねる。

「気づかないのかボーヤ！？ さっきまであった魔力が……」

「えっ……アッ、アレ!？」

「ちよつとどうしたのよ二人とも!？」

二人の反応にわけが解らない明日菜が聞くが、そもそも魔力を探知出来ない明日菜には今何が起きているのかすら解っていなかった。今起きていること、それは……

「魔力が、一瞬にして消えただと……」

魔力が突然消失したのだった……

『麻帆良女子中学園長室』

その部屋には今、麻帆良学園学園長及び関東魔法協会の理事を勤めている近衛近右衛門が座っていた。

「ふむ、状況はわかった。引き続き周辺の調査を頼めるかの？」

『ああ、流石の私も気になるのな……どういったモノかは知らんが、貴様もせいぜい気をつけろよ』

その言葉を最後に電話は切れ、部屋には静寂が流れた……

「うーむ、どうしたものか……」

（突如現れた魔力がいきなり消えるとは……余程の使い手か、はたまた人外の者か……）

謎の強大な魔力が突然消えたことに対し、近右衛門は内心焦っていた。麻帆良に浸入してくる者は少なくはないがどれも下級悪魔や鬼といった人外の者ばかりであるが、目的は見当がつく。

しかし今し方現れた魔力保持者の行動に目的が一切解らずにいた。

（アレ程の魔力を持つ者ならばこちらに気づかれずに浸入することなど造作ソウサもない筈なのじゃが、何故ワザワザ……）

思考を広げていると突然、学園長室の扉を叩く音がした為そちら

に顔を向ける。

（こんな時間に誰じゃ？）

「入りたまえ……」

「失礼する」

その言葉と共に一人の者が入ってくるも、近右衛門は渋い顔をしてその者を見つめた。

「お主、学園の者ではないな？　もし学園の者だったとしても、ワシはその様な格好の者を此処に招き入れる気にはなれぬしな……」

その者は、人でありながら悪魔を連想させる姿をしていた……

「して、お主の目的はなんじゃ？　ワザワザ此処まで来たということ
は、この老いぼれの命かの？」

その者は、闇を想わせるような姿をしていた……

「その様なモノに興味はない……」

その者は、観た者全てが悪だと断言する姿をしていた……

「俺はただ……」

しかしそれは間違いだと気づくだろう……

「ある世界の平和の為だけに動いているのだから……」

その者の声には、優しさがあるのだから……

第1話 彼の者、来たる
emd

第2話 彼の者、就く（前書き）

修正して再投稿

第2話 彼の者、就く

「ある世界の平和……じゃと？」

その者は確かにそう告げた。ある世界の平和と……しかし、それで何故自分の所に來たのかが解らずにいた。

「すまんが、お主が言った『ある世界の平和』……じゃったかの？
それとワシの所に來るのは、どういった繋がりがあるのじゃ？」

「繋がり……か」

そう呟くとその者は考える素振りソフをするも、黒い仮面をつけている為その表情は確認できない。

「強シイいて言うなら、ここが関東魔法協会であり、『紅き翼』とも関わりがあるからかな……」

その言葉に、近右衛門は髭をさする手を止めた。

「何故、紅き翼と関わりがあるത്？」

「否定もしなければ既定もしないとは……流石は関東魔法協会理事
長を勤めるだけはあるな」

「ふおっふおっ、ワシの事も調査済みのようじゃな……」

【高畑君、直ぐに来てくれぬか？ ……高畑君？】

会話の中、近右衛門は紅き翼の高畑・T・タカミチに念話をする
も、返ってくるのは砂嵐の音だけである。

「無駄だ。この部屋には既に念話妨害の魔法をかけてある。タカミ
チに來られては困るからな……」

「!？ ……その口振りじゃと、高畑君を知っている者かの？」

「知っている者……か……」

近右衛門の言葉にその者は両手を頭の左右に持っていき……

「タカミチとは、紅き翼にいた時の仲間だったからな……」

その仮面を外した……

「ぬっ!？ お主、まさか紅き翼の……」

その顔を見た途端、近右衛門は驚きを隠しきれずにいた。その者の顔は整っており、しかし血を思わせるような紅い瞳に銀髪と白い肌といった姿は、どこか悪魔を連想させるような感じがした。

「タカミチから俺のことは聞いているだろう？」

「……高畑君からは、お主はあの時に死んだと聴かされたのじゃが……」

「確かに、あそこに落ちればどんな奴でも死ぬはずだから……」

まあナギは別だがなど言いながら、その者は近右衛門が座る長机に近づいていく。

「さて、話が逸れてしまったが本題に入らしてもらおう」

「……お主がどうして此処に来たか、じゃろう？」

「その通りだ。俺が此処に来たのは、麻帆良学園学園長にして、関東魔法協会理事長である近衛近右衛門に頼みがある……」

そう言うのと、その者は片膝をつき頭を下げた。

「俺を……この麻帆良学園で働かせてくれ」

「……ふお？」

その言葉に、近右衛門は間抜けな声をあげてしまった……

「それは別に構わんのじゃが、理由を聞いても良いかの？」

「詳しくは言えない……だが、ある世界を平和にする為に必要な事なんだ……」

そう言いながらその者は顔を上げた。その目は血のような紅であったが、瞳には強い想いや決意が見受けられた。

「フム……良かろう。かの英雄殿の頼みじゃ。麻帆良学園で働くこ

とを認めよう」

「感謝する……」

その言葉を聴き、その者は立ち上がり再び頭を下げた。

「礼にはおよぼんよ。して、お主の働く場所なのじゃが」

「その前に、頼みたいことがある」

近右衛門が話す途中、その者は口を挟んだ。

「頼み、とな？」

「ああ、俺のことはタカミチや紅き翼のメンバーには話さないことと、俺が魔法使いであることは魔法関係者である生徒や先生方に話さないことだ……」

「フム、理由を聞いても……いや、お主のことじゃ。ある世界の平和の為に必要なことなのじゃろ？」

その者の頼みを聞き、理由を尋ねようとしたが無駄と判断し、聞くのを断念した。

「すまない……」

「気にすることなどない、人には言えぬことは一つや二つあるものじゃ。良からう、関東魔法協会理事長としてその頼み、ウケタマワ承った。その代わり、頼みたいことがあるのじゃが……」

近右衛門はそう言いながら困った顔をしながら髭を撫でる。

「今度、わしの孫娘がいるクラスが修学旅行に行くのじゃが、その場所が京都での……」

「京都といえば、関西呪術協会総本山がある……成る程、過激派か……」

「話が早くて助かるわい。孫娘の近衛木乃香を影ながら護衛してほしいのじゃ。頼めるかの？」

その頼みを聞きその者は少し考えた後、二つ返事で了承した。

「そうか、受けてくれるか……ならば履歴書はわしに任せよ。なに、履歴書の偽造なぞわしにかかれればちょちよいのちょいじゃ♪」

近右衛門はふおっふおっふおつと笑いながらそう言うがあえて言おう、最高権力者が職権乱用紛いなことをして良いのかと……

「そうか……ならばこれより、俺の名はフェイク……『フェイク・ネーム』だ。履歴書にもそう書いておいてくれ」

「フェイク・ネーム、『偽りの名』か……しかしフェイク君、偽造の面はこれで良いとして魔法先生方、特に高畑君はどうするのじゃ？ 流石にわしでもバレぬ保証がないのじゃが……」

確かにそうである。公式にはフェイクは、フェイクと名乗る者は死んだことになっているが魔法関係者、特に仲間であつたタカミチにはバレてしまう可能性がもっとも高かった。

「その心配はない。俺の身体には高位の認識阻害魔法が施してあるし、何十にもわたる認識阻害の魔法具を付けてある。それに魔力等も完全に外部から遮断した。いくら紅き翼の仲間であつても正体がバレる心配はない」

フェイクは軽くそう言うが、それを聞いた近右衛門は驚きを隠さずにいた。

（言われてみれば、彼からは魔力や気も感じられないが、何故今まで気づかなかったのじゃ！？　それどころか、気を抜けば彼が英雄であることを忘れてしまうとは……）

「話はすんだな？　では、俺はこれで失礼する」

それだけを言い残すとフェイクは扉へ向かい、出ていこうとする。

「まっ、待つじゃ！？　これで失礼するって、まだ詳細を話しては「問題ない、護衛対象を影から護る、それが今頼まれた内容だ。修学旅行終了後、俺を教職員にすればタカミチに怪しまれる可能性はなくなる。では失礼する」

そう早口で伝えたとフェイクは学園長室から退室した。

「ふむ……」

フェイクの出ていった扉を見ながら、近右衛門は椅子の背もたれに体をゆだねた。

「まったく、まだ伝えとらんことがあるというのに……」

そう呟きながら、近右衛門は深いため息をついた。

（しかし、何故死んだように見せなければならなかったのじゃ？
それに、ある世界とは一体何なのじゃろうか……）

彼の者は麻帆良学園に就いた……

それは何故か……

それを知るものは、彼の者と神のみぞ知る……

第2話 彼の者、就く
e n d

第3話 彼の者、着く（前書き）

ミス発見、再投稿

第3話 彼の者、着く

夢をみた……

懐かしい夢をみた……

その夢は過去ではなく、それ以前の夢……

過去、現在、未来……

夢にはそういったモノがある……

ならば、それ以前とはなにか……？

それは誰もが持っていて、誰もが忘れているモノ……

人はソレを前世と呼ぶ……

しかし、彼の者にとってそれは前世にして前世にあらず……

ならば、いったい何なのだろうか……

それは、神と彼の者しか知らない……

——まもなく京都です

お忘れものないよう――

「んっ……」

JR新幹線ひかり213号車内よりアナウンスが流れそれにより夢の中にいた彼、フェイクは目を覚ました。しかしまだ覚醒しきっていないのか、目は虚ろでどこか眠たげな様子である。

「もう……着いたのか……」

小さくそう言いながら眠たそうな目を擦ろうとするが、不意にその手は止まった。

否、止めてしまった……

「泣いているのか……？ 俺……」

頬を流れる水を手で触り、やっと自分が泣いていることに気づく。

「ははっ……」

（まさか、夢ごときで泣くなんてな……）

乾いた笑みを浮かべながら両手で眼を覆い、体を俯かせた。

（こんなんじゃない……アイツの願いを叶えられないじゃないか……）

両手で眼を覆うも涙は止まらず、今も流れ続けた。

「では皆さん、いざ京都へ!!」

『おーー!!』

しかし、泣いているフェイクとは逆に他の車両から元気な声が聞こえてきた。

（そうか……そうだったな……）

「俺には泣いている暇はないよな……」

そう呟きながら目を擦り、立ち上がる。その瞳には先ほどと違い、強い想いがみてとれた。

「俺はアイツの願いを絶対に叶える……」

（どんな手を使ってでもな……）

そして彼は新幹線から降りた。これから起こることを考えながら
……

『京都・清水寺』

3ーA一行は今清水寺の本堂、いわゆる『清水の舞台』に来ていた。

「京都おーっ!!」

「これが噂の飛び降りるアレ!!」

「誰かつ!! 飛び降りれっ」

「では拙者が…」

「おやめなさいっ!!」

他の観光客もいるのだが、そんなことは関係ないと言わんばかりに3ーAの殆どが騒いでいたが、不意に近くを外国人が通り過ぎた

為そちらに目を向けた。

「おーっ！ 外人だよ史香！！」

「お姉ちゃん、私達のクラスの何人かは外人さんだし、先生も外人さんだよ」

姉の風香の言葉に妹の史香は苦笑しながら言う。外国人は足を止め、清水寺のことを説明している夕映の方へと顔を向ける。

「生存率は85%ですか……」

不意にそう言った外国人に対し風香はニヤリと笑い、その外国人に近づいていった。

「どうかしたんですか外人さん♪」

「ん？ いやなに、日本では清水の舞台から飛び降りるという伝統があると聞いたので、見に来たのですが……本当ですか？」

そう言いながら首を傾げる外国人に対し、風香は笑顔で本当だよと答えた。

（お、お姉ちゃんっ！？ そんなウソついたらダメだよー！？）

（平気だって史香。普通に考えれば飛び降りるなんてことしないから♪）

そう小声で話をする中、外国人はそうですか……と言うと手すりまで歩いていく。

「お、お姉ちゃん？」

「どうしたの史香？」

「あの外人さん、手すりの方に近づいてる様に見えるんだけど……」

「史香、流石にそんな訳……」

そう言いながら二人はその外国人を見ると……

手すりの上に立っていた……

「ワアアアッ!？」

「ダッ、ダメですうううっ!？」

二人は急いで外国人の所まで走り、落ちないように足を掴んだ。

「なっ、何やってるんだよお兄さん!？」

「? 清水の舞台から飛び降りるのが伝統と言いましたので飛び降りてみようかと……」

「アレは嘘!! だから飛び降りちゃダメだって!？」

「しっ、死んじゃいますーっ!？」

必死に足を掴む二人であったが、これほど騒いでしまえば周りも気になり目を向けてしまう訳で……

「飛び降り自殺!？」

「まさか目の前で!？」

「特ダネだーッ!!」

「何言ってるのよ朝倉!？ 風ちゃん史ちゃん手を離しちゃ駄目よ!？」

案の定、大騒ぎになった……

「そっ、そうだったんですか……僕の生徒がすみませんでした」

あの後この経緯を説明した風香と史香の話を聞いたネギは、飛び降りようとした外国人に対し頭を下げた。

「ごめんなさい……」

「ごめんなさいです……」

「いえいえ、頭をあげて下さい。ジャパニーズジョークを間に受けた俺も悪いのですから」

そう言って頭を下げる三人に対し、頭を上げるように言う。

「ありがとうございます。僕、このクラスの担任をしているネギといます」

その者は銀髪……

「これはどうも、名乗られたのなら名乗るのが礼儀、と日本では聴きました」

その者は眼鏡をかけ……

「俺の名前は……」

フェイク、

フェイク・ネームです」

その者は、血のような紅い瞳の持ち主……

第3話 彼の者、着く
e n d

第4話 彼の者、想う（前書き）

お待たせしました。

三方島さんのアドバイスを入れて何とか努力しました。

楽しんでいただけたら幸いです……

第4話 彼の者、想う

『地主神社』

清水寺での出来事（外国人自殺未遂事件？）から、フェイクは3―A一行と共に京都を一時的に回ることになり、今はネギと話をしながら地主神社へ向かう3―A一行を見ていた。

「そうなんですか、麻帆良で先生を……」

「はい、それで僕のクラスは留学生が多いので、修学旅行は京都になりました……」

「確かに、外国人からすれば京都は素晴らしいですからね。ジャパニーズ・サムライとか、ワサビとか♪」

「あの、流石に今の時代に侍はいませんし、ワサビではなくワビサビでは……」

（同じ外国人でもここまで違うとスゴいっすね兄貴……）

（ハハハッ、そうだね……）

フェイクの発する言葉を聞き、若干間違った認識をしていることにネギとオコジョ妖精、アルベール・カモミールは苦笑するしかなかった。そんな中、3ーA一行は目をつむって石から石へたどり着けば恋が成就するという恋占いの石の近くにいた。その距離は20メートル位はあるらしい。

「で、ではクラス委員長の私から……」

「あー、ずるい！ 私もいく!!」

「わ、私もー……」

その話を聞いたあやか、まき絵、のどかは挑戦すると言いだし、一部の生徒は誰が最初に着くのかで賭けをし始めた。

「女子中学生が人目を気にせず堂々と賭博をする……なるほど、あれも日本の風習なのですね？」

「ちっ、違いますよフェイクさんッ!？」

間違った知識を認識しそうなフェイクに対しネギは直ぐに否定す

る。そんな事をしている中、あやかが恋の心眼術なる無駄なものを使い、目標の石を確認すると走り出した。それを薄目で見ていたまき絵もその後を追いかける。

「ずるーい、いいんちょ目開けてるでしょ!？」

「ホホホ、まさか!!　これで私と某N先生との恋は見事成就ですわ!!！」

そんなことを叫びながら二人は目的の石まで全速力で走り……

落とし穴（カエル入り）に落ちた……

「だ、大丈夫ですかまき絵さん、いいんちょさん!？」

「やはりこれが風しゅ「違いますからねフェイクさん!？」

穴に落ちた二人をネギと一部の生徒は引き上げる中、再び間違った認識をするフェイクに突っ込みを入れた。

その後恋占いの石を後にした一行は次なる場所、音羽の滝へと向かい、右から健康・学業・縁むすびだと夕映の説明を聞き、一斉に一番左側の縁むすびへと足を進めた。

「凄い勢いで逝きましたねー♪」

「あの、若干字が違うような気が……」

「えっ？ 中学生なのにお酒をあれだけ飲んでるんですから間違っ
てないですよ？」

「……お酒？」

フェイクの言葉に突っ込むも、お酒という言葉が出てきた為縁む
すびの水を飲んでいる3ーAに視線を向けると……

「……何かみんな酔いつぶれてしまったようですが……」

「いいんちよっ、しっかりしなさいよ!!」

「はひー？」

「ええーっ!？」

皆見事に逝っていた……

「これが日本のふ「違いますっ!?!」」

ネギは直ぐに屋根を調べると酒ダルが置いてあり、近くを通りかかった先生方に嘘をつき、その後一部の酔った生徒をバスに押し込んだりと慌ただしく動いていた。

「……仕方ないな……」

その時、屋根の上からその事を見ている生徒に気づかずに……

否、ある者だけはその生徒に気づかれずに見ていた……

「……………」

（桜咲刹那……詠春と同じ神鳴流の使い手……）

それは新世界の大戦時、サムライマスターの異名を持ち、かつて紅き翼にいた頃の仲間だった男、青山詠春が用いた流派だった……

『こんな所で何してるんだ？ 不知火』

『詠春か……何、少し眠れなくなてな……』

『そうか……』

『……なあ、詠春……』

『何だ？』

『……英雄って……何なんだろうな……』

『不知火？』

『人は俺達を英雄にして祭り上げたが、そもそも人殺しが英雄になれるものなのか？ 俺には理解しがたいことだ……』

『………』

『悪いな、変なことを聞いちゃって……忘れてくれ……』

『それでも……』

それでも俺達は、立ち止まるわけにはいかない。立ち止まってしまうたら、今まで俺達がしてきたことが無駄になってしまうのだから……』

『無駄になる……か……ありがとよ……』

『何言ってるんだ。』

俺達、仲間だろ？』

「仲間、か……」

（アイツらはまだ、俺のことを仲間だと想ってくれてるのだろうか……）

彼の者の言葉は風に流れ、消えていく……

かつて英雄と呼ばれた彼の者は、仲間を想い何を想うのか……

それを知るものは……誰もいない……

e 第
n 4
d 話
彼の者、
想う

第4話 彼の者、想う（後書き）

如何でしたでしょうか？

感想等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2813p/>

平和な未来の為に……

2011年10月7日05時15分発行